

## ＜学会記事＞1. 口腔粘膜にみられた増殖性病変(第5回 東北大学歯学会大会講演抄録)(一般演題)：鑑別診 断について

著者	大久保 勉
雑誌名	東北大学歯学雑誌
巻	3
号	1
ページ	59-59
発行年	1984-08-15
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/31139">http://hdl.handle.net/10097/31139</a>

## 第5回東北大学歯学会大会講演抄録

日時：昭和59年6月23日午後1:30～4:00

場所：東北大学歯学部B棟第一講義室

### — 一般演題 —

#### 1. 口腔粘膜にみられた増殖性病変

##### ——鑑別診断について——

大久保勉, Ba Myint (口腔病理)

口腔粘膜にみられる増殖性病変と上皮異形成症を鑑別診断する際、上皮異形成性変化の中で重要な所見は何であるかを知る目的で、1778年より1983年の口腔病理学教室で診断された生検・手術材料中、上皮異形成症17例、上皮過形成43例、上皮過角化症12例、乳頭腫13例を用いて、光顕的に、極性の喪失・滴状上皮脚・異常分裂像・側方増殖・下方増殖・人工裂隙・角化様式について観察した。結果：① 極性の喪失は上皮異形成症で29.4%，② 滴状上皮脚は上皮異形成症で47.1%，上皮過形成で4.7%，③ 異常分裂像は上皮異形成症で11.8%，上皮過角化症で8.3%，乳頭腫で7.7%，上皮過形成で2.3%，④ 側方増殖は上皮異形成症で70.6%，上皮過形成で27.9%，上皮過角化症で16.7%，⑤ 下方増殖は上皮異形成症で76.5%，上皮過形成で55.8%，上皮過角化症で16.7%，⑥ 人工裂隙は上皮異形成症で88.2%，上皮過形成で32.6%，乳頭腫で53.8%，上皮過角化症で8.3%みられた。⑦ 角化様式では錯角化症が上皮異形成症、乳頭腫、上皮過形成で88.2%，84.6%，83.7%みられた。有極層内上皮真珠は上皮異形成症、上皮過角化症、上皮過形成でみられた。尚、今回検索した上皮異形成症の46.2%に癌化が認められた。以上の結果から、(1) 基底細胞の極性の喪失は上皮異形成変化の中で最も重要な所見と考えられた。(2) 基底細胞層の滴状上皮脚は上皮過形成にわずかにみられたが上皮異形成症の重要な所見と考えられた。(3) 異常分裂像は上皮異形成症、増殖性病変のどちらにも認められた。(4) 人工裂隙は上皮異形成症で88.2%，上皮過形成で32.6%みられたが、その程度は明らかに前者で著明であった。(5) 側方増殖・下方増殖・有極層内上皮真珠の形成は上皮異形成症、上皮過形成、上皮過角化症でみられるが上皮異形成症で高頻度に認められた。

#### 2. 下顎大臼歯の頰側歯帯について

菊地正嘉 (口腔解剖1)

ゴリラ (*Gorilla*) の下顎大臼歯の頰側面にみられる著明な歯帯 (Cingulum) と相同のものがヒトの下顎大臼歯のエナメル象牙境 (象牙質の表面) にも観察される。エナメル象牙境における歯帯の近心上昇部の発達が良好な場合には、それが歯冠表面にも反映し、エナメル質の小隆起とし近心頰側面に観察される。すなわち下顎大臼歯の近心頰側面にみられるエナメル質の小隆起は歯帯に由来する形像である。

この小隆起の出現頻度、および各大臼歯相互の出現傾向を、本学学生を対象として得た約500組の石膏模型により調査し以下の結果を得た。

1) 各大臼歯における出現頻度は、第一大臼歯42.4%，第二大臼歯15.7%，第三大臼歯34.1%で第一大臼歯において最も高く、第二大臼で最も低い。

2) 第二大臼歯に出現する小隆起は発達微弱なもの (+) が大多数をしめる。一方、第三大臼歯では発達良好なもの (++, #) が過半数に達する。第一大臼歯ではこの両者のほぼ中間の分布様式をとる。

3) 各大臼歯の左右間における出現傾向に関しては第一、第二、第三大臼歯ともに両側性に出現する個体数が期待度数 (右側の出現と左側の出現とは全く関係がなく、独立事象であると仮定した場合の理論値) よりも高く、逆に片側性に出現するものは低い。したがって左右の大臼歯間には小隆起の出現に関して相互関係が認められる (危険率1%)。

4) 同側の各大臼歯相互間における出現に関して、第一と第二大臼歯、第二と第三大臼歯および第一